

2026年度 岡山大学 第三問〔問題編〕

「岡山大学の古文」についての回となりました。2026年の古文を取り上げてお話をしたいと思います。なお、前年の2025年の古文から「出題の仕方」に変化がありました。岡山大学は『大和物語』、『平中物語』、『宇治拾遺物語』というように、単一の物語・説話を出題するのが伝統的な形式でした。が、2025年度には『伊勢物語』・『万葉集』・『古来風体抄』を組み合わせた「物語＋古歌＋歌論」の複数テキスト横断読解へと変化しました。さらに今回の2026年度は同じ紀行文の中から出題とはいえ、「出立」と「旅の終わり」という時間差のある二場面が提示されるという形でした。このように、従来の単一説話のストーリーリ―解読から、複数の題材による統合読解、同一題材の別場面の対比読解へと変化しています。

ただし、それは表面上のことであり、「重要古語や文法」に即した「正確な現代語訳」、「本文根拠に基づく記述力」、といった基礎的な力を問う問題を基軸にしている点は変化していません。臆することなく、文法・単語・古文常識・話のパターンに慣れる、というオーソドックスな勉強法を続けていれば対策になると思います。

三

次の文章は、三条西公条が紹巴・宗見らとともに旅に出立した場面および旅の終わりの場面である。これらを読んで後の問に答えなさい。（出題の都合上、本文に手を加えたところがある。）

〔出立〕

いにし年の秋、はからず年ごろ臥ふしなれたる注二床離れ、かきつくべき心地もなく、あはれ修行にも出で立ちなばやと思ひつつ、とかく紛れしに、紹巴とて①筑波の道に心ざし深く、このころ都の住まひし侍りて、夜昼来訪きしかうひけり。しかも敷島の大和の国の人にて、道たどしからず、ア吉野の花見るべきよし、いざなひけり。さらばとて、人々に言ひ触ることなくて、無下に顔知らぬ人、宗見といふ人を召しつれて、今年天文二十二年二月二十三日の朝、ひそかに都を出で侍るとて思ひ続けける、

名残思ふ②妹背いもせに逢あへる道やあると吉野の奥を尋ねてぞ問ふ

〔旅の終わり〕

十三日。早朝に注一御影堂にイ参れり。注三男山八幡に参り、帰るさ御釈迦のおはします堂にて、ある人酒すすめ帰りぬ。このほどの疲れゆゑ、心地あしく、今日は臥し暮しけり。

十四日。水無瀬より輿こしにて帰りにけり。羽束師の森のほとりにて、輿を立てたる所にて、このあたりの名所ども、大方ここを限りなるとて、

旅衣たち隠ればややつれ来し身をはづかしの森の木陰に 紹巴

返しに、

注四 邂逅と思ふ^ウ 日数も積もりつつ早やはづかしの陰に来にけり

都出でし日数、二十日になりけり。かくて東寺南大門まで都より迎へに人々来たり。これより乗物を返し、うち帰りにけり。道すがら^{注五} 障礙なく^{しやうげ} 帰りし事申して、^{注六} 野宮寺より出で立ちしかば、^{のみや} ここに帰り着きて、いつしか名残惜しげにてみな別れにけり。

エ やがて立ち帰りても、独り住みの床も荒れて、道すがらの物語りすべき便りもなければ、

語るべきことはかずかず涙のみ古き軒端の^{注七} つまなしの花

ぞかひなきや。

老の坂上り下るもこのたびを限りと思ふに深き山道

今生の宿望、末世の結縁、満足するものなり。

(『吉野詣記』による)

注一 床離れ^ニここでは、公条が四十二年あまり連れ添った妻に先立たれたことを指す。

注二 御影堂^ニ後鳥羽院を祀る堂。

注三 男山八幡^ニ石清水八幡宮のこと。水無瀬の対岸にある。

注四 邂逅^ニここでは思いがけないことを指す。

注五 障礙なく^ニ障害なく。

注六 野宮寺より出で立ちしかば^ニ都を出立する際に野宮寺に集合したと見られる。

注七 つまなし^ニ梨のこと。

問一 傍線部アイウエを現代語訳しなさい。

問二 破線部①は、ある文芸を指す。この文芸は、和歌の上の句(五七五)と下の句(七七)を交互に別の人が続けていく遊びである。破線部①が指す文芸の名前を答えなさい。

問三 破線部②は妹背山のある吉野への出立を詠む歌の一部である。掛詞に注意して出立の理由を説明しなさい。

問四 「旅の終わり」の場面における公条の状況と心境の変化について、家に帰り着くまでと帰り着いた後を対比させて説明しなさい。

※本問題は2026年度の岡山大学前期試験の古文の問題です。

2026年度 岡山大学 第三問〔解答解説編〕

〔解答〕問一ア

解答… 吉野の桜を見るのがよいということ誘ってきた。
解説

「紹巴が私を誘った」という文脈で傍線部を解釈する問題であると確認する。ポイントは、「べき」の解釈だろう。「紹巴が私を誘った」のだから助動詞「べし」訳としてふさわしいのは「適当(―するの

がよい)」だろう。なお、「よし」は「よし」ということ」と訳す形式名詞で訳するのがよいだろう。さらに「花」の解釈として、古文の世界において、単に「花」とあれば春の「桜」を指すのが基本である。「吉野（現在も奈良県の桜の名所として有名）」は、古くから桜の美しさで和歌に詠まれてきた土地である。

問一イ

解答…参詣した。（参上した。）

解説

傍線部の前の「御影堂」が、注意書きに「後鳥羽院を祀る堂」とあるから、単に行くのではなく、神仏のいる場所へ行くことを踏まえて「参詣」のニュアンスで「参る」を訳したい。後は助動詞「り」を「完了」で訳す。「参詣した」と解答したいが、「参上した」でも大学側は正解として与えている（岡山大学は模範解答をホームページに掲載してくれている）。

問一ウ

解答…旅の日数も積み重なり続けて。

解説

紹巴への返歌としては些か会話のような対応がないものであるので解釈は難しい。「つつ」という「接続助詞」の訳がポイントだろう。「……ては」「……し続けて」「……しながら」「……にもかかわらず」「……て」「しきりに……していることよ。」など様々な訳が考えられる。ここでは、「……て」（大学の模範答案はこの訳）、もしくは「日数」が旅の日数の積み重ねなので、継続を表す「……し続けて」あたりが無難だろう。

問一エ

解答…すぐに家に立ち帰ってみても（そのまま帰宅してみても。）

解説

古文単語「やがて」の意味、そして「省略」をいかに補うか、が問われている。文脈をたどれば、公条が「どこへ」帰ったのかは自明である。直前に「（自分の家に）」という言葉を補って訳すか、そのニュアンスを解答に含める。これで傍線部の直後の「独り住みの寢床」という妻のいない自宅への帰宅と理解できる文にできる。「やがて」は、「そのまま・引き続き」「すぐに・ただちに」「ほかでもなく・とりもなおさず」「そっくり・そのまま全部」「まもなく・そのうち・いずれ」などの意味だが、ここでは、【妻に先立たれた後なので、すぐに家に帰っても旅のことを語る相手がいないので甲斐がない】という文脈から考えて「すぐに」の訳が適当だろう。

問二

解答…連歌

解説

設問条件の「和歌」を「別の人が続けていく遊び」で解答可能だろう。「連歌」は受験生が必ず知っておきたい文芸である。なお、「筑波の道」とは「連歌」を指す古典特有の雅称。ちなみに和歌は「敷島の道」と呼ぶ。中世の教養人にとって連歌は必須のたしなみであり、本文に登場する里村紹巴（さとむらじょうは）は有名な連歌師である。

問三

解答…妹背山に続く道を巡れば、妹（妻）と背（私）が逢うこともあろうかと思ったから。

解説

「床離れ」の注意書き「四十二年あまり連れ添った妻に先立たれた」を踏まえ、「妹背（いもせ）」は「特に親しい間柄の男女。夫婦」を指す重要な古文単語であることを考えれば解答可能である。「掛詞」の技法として「いもせ」という音に、「特に親しい間柄の男女。夫婦」と、実際の目的地である吉野の「妹背山」の二重の意味を持たせている。最愛の妻に先立たれた筆者の、癒えることのない悲嘆から、吉野の奥にある「妹背山」へ至る道を歩めば、もしかすると亡き妻ともう一度「夫婦（妹背）」として巡り会える方法があるのではないか、という願いが込められた和歌である。「願いが込められている」という文意から、和歌の結びにある「やある」に注目する。係助詞「や」によって末尾の動詞が連体形「ある」となる「係り結びの法則」が使われている。「……（手立てが）あるだろうか」という強い思いがここに表れているのである。

問四

解答…旅の終わりでは同行の者たちと名残を惜しみ合いながら別れたが、家に帰り着いた後は、旅の話聞かせる妻もいない現実の中で、己の生涯への思いに耽っている。

解説

帰宅後に詠まれた和歌の詞書「語るべきことはかずかず涙のみ」が重要である。「べき」は当然の助動詞で「語って聞かせるはずの」と訳せばよいだろう。また「つまなし」という言葉に、果物の「梨」と「妻無し」を掛けている。中世文学の根底に流れる「無常観（すべてのものは変わりゆくという思想）」や仏教的価値観が色濃く出ており、文末の「今生の宿望」「末世の結縁」といった語彙から、この旅が単なる物見遊山ではなく、自らの死生観を問い直すような旅であったことが読み取れる。「旅が終わることの名残惜しさ」「妻のいない孤独」、そして、「自らの人生・生涯への満足」についての記載が欲しい。